

忘れられない言葉



北海道大学医師会
苫小牧市立病院

まち だ まさ はる
町 田 正 晴

三つ子の魂百まで。私が医師として駆け出しのころ言われた4つの言葉が忘れられません。

いずれの言葉も、それを発した本人と受けた私の間で解釈に違いがあるかもしれないことをお断りした上で、私の解釈をつけて記載したいと思います。

①【物が無いことを理由に治療の限界を決めてはいけない。工夫の余地を見つけて実行すべき】

この上司は人工呼吸器が足りなくなったときに、挿管チューブのTピース排気端を水封してPEEPをかけていました。今であれば医療資源のある環境への移送が望ましいと思いますが、限られた医療資源の中で思考停止に陥らず治療の可能性を常に考えなさい、と解釈しました。

②【看護師は忙しい。一番暇なのは君だ。看護師を手伝え。まず動け】

ICUでの患者急変時です。看護師がルートを確認したり薬液を詰めたり走り回っています。指示簿に指示を書いている私に上司が放った言葉です。自ら責務の範囲を決めるのではなく、その環境で自分が求められていることは何か意識し行動しなさい、と解釈しました。

③【看護師の血圧を測る聴診器で聴こえる心音に臨床的な意味があって、名人が高い聴診器で聴いてやっと聴こえるような音はあまり意味がない。実際どんな聴診器でも心エコーには敵わないよ】

聴診のスペシャリストが言った言葉です。当時神のように尊敬していた医師の、自分の技を否定するような発言に驚きました。誰しものが認識できる普遍的なことに臨床的な価値があること。高度な手技を要するような事象にも価値はあるが、手技の限界を知り名人芸に固執せず、名人芸が不要な別の普遍的な方法を探求しなさい、と理解しました。

④【技量が低くて優しい医者と、技量が低くて無愛想な医者ど、どちらが患者にとって良い医者だと思う。それは技量が低くて無愛想な医者だよ。技量が低くて優しい医者だと患者は逃れられず技量が高い医者にかかるチャンスを失うじゃないか】

この解釈は皆様にお任せします。

この4つの言葉をいただいたのは30年以上前のことで、令和の世的には首をかしげる言葉かもしれません。医療は社会システムの一部であり社会の変化により変化し得るものですが、私にはどの言葉も普遍的な医療の本質を内在しているように思えます。

私が診療の現場に立つ期間も限られてきました。

医療を取り巻く環境は絶えず変化していますが、自分が現場を離れたときに自分の身を任せられる良い医療環境があること。それを望んでやみません。

道東道北を巡って



旭川市医師会
北彩都病院

すず き あや な
鈴 木 彩 葉

思いがけなく「新春随想」の依頼をいただき、拙いながらも執筆させていただきました。前年度までしばらく網走におりまして、海辺の町は魚が美味しく、コロナ禍を越え少しずつイベントが復活してきているところでした。雪は少ないものの風で吹きだまるため積雪0の日に自身の車の前だけ雪の山という日もありましたが、知床や阿寒、これからリゾートが立つ川湯温泉にも足を延ばすことができ楽しい地でした。自然豊かな地で絶景カフェや散策を楽しんでいたところ、マダニに噛まれ教科書通りの所見を得て抗菌薬によるめまいも経験しました。自然のアクティビティは豊富でベテランダイバーは流水の下にも行けるようです。学生時代は南の海でのダイビングに挑戦しましたが、夏でも冷たい北海道の海にはまだ挑戦しておりません。美味しい魚が泳いでいるのは見られるようなので、流水チャレンジは厳しいですがいつか夏の海になら潜れたら良いと思います。真冬は散歩も凍えるのでリニューアルしたオホーツク流水館で満足しておりました。小学生の頃は氷点下2ケタ、テントなし吹きさらしの中、ワカサギを釣っていたこともあったはずなのですが、毎日病院と家の往復で軟弱になったようです。

今年度久しぶりの旭川はいつの間にか知らない建物が増えて、フードフェスティバルで賑わう様子など都会らしくなり、懐かしさと新鮮さがありました。旭川も寒さは負けておらず、本州は猛暑の夏の終わりに訪れた箱根彫刻の森美術館、直射日光で熱い野外展示の目玉焼きのオブジェで一休みしながら散歩した30℃超えの暑さを惜しみながら帰還した旭川は、数日のうちに最低気温5℃。掲載される頃には氷点下続きと思いますが、積雪に負けず良い一年の始まりにしたいと思います。